

## くじら日記

太地町立博物館から



暗く、静まり返った夜のくじらの博物館。ひっそりとたたずむ巨鯨の模型や骨格標本、時折水面上に現れるクジラの黒い影と息遣い。少し不気味で、でも非日常の光景に胸が高鳴るのではないだろうか。

令和6年3月から、日中とは異なる空間での体験を提供するコンテンツ「夜のくじら」に会いに行こう。太地町立くじらの博物館ナイトミュージアムの造成に取り組んでいます。ナイトミュージアム体験は、今年10月頃からの開催を計画しています。

体験に向け、博物館の展示は重厚感ある演出を意識しました。江戸時代の古式捕鯨の様子が描かれた「紀州熊野浦捕鯨図屏風」(複製)や、当時の捕鯨用の漁船「勢子船」の現存する一部、「水押」と「棚板」には、下から柔らかな光で照らし、あたたかもうる

## ナイトミュージアム体験



手作りのくじら提灯に興味津々のカズハ  
ゴンドウ(左)とマダライルカ(右)

そこの火をともして眺めるかのような情緒も味わえるようにしました。  
シャチの骨格には挟角の光をあてることで、頑強なあごと大きく鋭い歯を白い壁に投影させ、特徴を際立たせまし

た。光の当て方を慎重に調整する学芸員は「視界が限られる夜だからこそ、それを活かす見せ方がある。光で陰影をつけ、浮かび上がった資料を集中してみしてほしい」と、こだわりを語りました。

## クジラ、イルカ 夜の生態に驚き

一方、イルカプールや水族館はライトを使い幻想的に色づけました。水中観覧窓から青い光を照らしたり、頭上から水面に光を当てたりすることで、光が射す水の美しさを強調しました。ただ、クジラたちの暮らしを妨げないために過度な演出は避け、本来の夜間の生態を観察できるようにも気を配りました。飼育員は、「ひとけのない夜、クジラたちがどのように過ごしているかのぞいてほしい。睡眠のとり方など、新しい発見もあると思う」と言います。

午後6時ごろ、日が沈みました。完成したばかりの提灯を片手に、ナイトミュージアムへの扉をくぐります。ライトアップされた模型や骨格の存在感、クジラの鳴音が入ったBGMによる臨場感が高められていて手応えを感じました。日中とは別世界です。学芸員は参加者を連れ、捕鯨の歴史やクジラの生態をガイドしました。雰囲気が高揚したのか、普段より解説に熱が入っていました。

予想に反したのは、水族館のイルカたちでした。足を踏み入れると、すぐにイルカたちが寄ってきました。提灯に気付くと、見慣れないためかそれに目がくぎ付けになり、追いかけるしゃぎ回るのです。思わぬ時間の来客に、イルカたちにとっても大興奮の夜となりました。

(太地町立くじらの博物館 館長 稲森大樹)